
嘘と罰

千尋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘と罰

【Zマーク】

Z6606A

【作者名】

千尋

【あらすじ】

22才! 今時の女の子の悲しいラブストーリー。自分がついた嘘は自分を苦しめる…。もう一度彼に会いたい。

私は何故彼にあんな嘘を行つてしまつたのだろう。

どうしてもつと素直になれなかつたのだろう。

私は自ら幸せを壊してしまつた…。

彼とは運命的な出会いだつたと私は思う。

当時サーフィン、スノボー、スケボーなどを取り扱うスポーツショップで働く私はいつももの様にレジを打つていた。「おつかれーす」と同僚のけいくんに挨拶を交わしスケボーコーナーへ行く彼。作業服に頭にはタオルを巻き、腰パンスタイル。いかつい顔にヒゲ…。そして片手にはビール。どこからどう見ても30才手前という感じだ。

しかしその彼が私の1才上だから信じられない。

何故か私は彼から目が離す事ができなかつた。「有難うございました」

スケボー用品を購入した彼に、とびっきりの笑顔で言つた。

彼は驚いた表情でペコリと頭を下げ、けいくんと話をしていた。

私は気付いた。彼の笑顔だ。笑顔がとても魅力的で私は彼から目が離せなかつたんだ。

その瞬間私は恋に落ちていた。

彼が店から去る姿を見つめ、けいくんに、

「あの人は彼女いるの?」

「一年くらいいないよ。どうした?」

というのがきっかけで彼を紹介してもらつ事になつたのだ。まずはメールから始まり電話も少しする様になつた一週間後。彼から食事に誘われた。涙ができる程嬉しかつた。

しかし私は自分に自信がなかつた。

私はまるで歌舞伎役者の様な化粧に、くるくる巻いた髪。誰がどう見ても今時の子。しかしどうゆうわけか男の人と話をするのは苦手なのだ。

だが私は彼の笑顔にとりつかれたかの様にすんなりOKした。待ちに待つた2005.5.27。

仕事を終えた私は彼が待つ駐車場へ急いだ。

「おつかれーす」

いた！彼がいた！しかもあの笑顔だ。

緊張を忘れ私まで笑顔になつていた。

車に乗り込み向かつた先はラーメン屋。初めての食事がラーメン。パスタやフレンチを期待していた私だったが、そんな事どうでもよかつた。

彼と同じ時間を過ごせるなら何だつてい。ラーメンを食べながら額や鼻に汗をかく彼を見て、私はニヤけた。

彼はさりげない氣の使い方、優しさ。全てそれが普段の彼だった。作られた優しさではなく。

それから何度も彼と食事に行き夜景を見たり、海で語つたり。そんなデートをしようとした2005.5.31。彼はいつも海へ車を走らせ浜辺近くの階段に座り、たわいもない話をしていた。ところが今日の彼はどこかぎこちない。話ながらもため息をつき、無言になる。ふと気が付くと私達は手をつないでいた。

甘い幸せな時間だった。

家に帰り私は彼への好きな気持ちをメールで伝えた。

彼は

「海で言えなかつたけど、俺も好き。つきあおう」そうして二人はカップルになつた。彼の全てが大好きで彼もまた私の全てが大好きと言つてくれた。

それから10ヶ月、何度かケンカもしたし旅行にも行つた。ごく普通の付き合いの方だった。けれどそんな二人は離れる事などしなかつ

た。お互い愛し合っていたから。彼は私の事を本当に大切にしてくれた。支えてくれていた。

そんなんある口体調がおかしかった私は、女の勘とゆうのか妊娠検査薬をした。

見事的中。妊娠していたのだ。しかし検査薬だけではまだわからない。けど彼に伝えたい。妊娠した事を彼に告げると何故か浮かない表情。

どうして?すぐ不安だった。彼は

「できたのはすじく嬉しいけど今の給料では幸せにできない」

聞きたくない言葉だつた。彼からそんな言葉ができるなんて思つてもみなかつた。「病院に行つてちゃんと調べてもらつてから考えよう」と彼。

私には100%できている事は分かつていた。

産みたい。彼の子を産みたい。

私は、ご飯も食べれなくなる程悩んでいた彼に

「産みたい」

と言えなかつた。

彼が悩む姿なんて見たくない。私は自分の気持ちすらわからなくなつていて。1週間後私は病院に行つた。

「2カ月ですね」やつぱり!彼の子がいるんだ。

私は嬉しさの半面不安が募つていた。

おろせと言われたらどうしよう。

怖いながらも彼に電話した。

彼の一言で私はおかしくなつた。

「はあ…そつか

なんで?どうしよう。何つて言おう。どうしよう。「あなたの子じやない」

とつさに口にしたのは、紛れも無い嘘だつた。気が動転していた私はとんでもない事を言つていた。顔が青ざめ倒れるくらい頭が真っ白になつた。

彼は純粋だ。何事にも一生懸命頑張る人だ。

私が妊娠した事も彼なりに一生懸命悩んでいたのを知っていたのに。

私は嘘をつきとうそり。

私があなたの子という事実を言つても彼は、裏切られたという気持ちが強くて、また心に傷をおうだらう。嘘をつきとうそり。

私は心にそう誓つた。だが、現実は甘くはなかつた。

中絶…。私はとても苦しかつた。愛していた彼の子を産めないなんて。

すぐ悩んだ。

彼に本当の事を言おうか。それでも私の言つた嘘は彼の心から消えない。

なぜなら彼が純粋だから。彼の事を考え私は中絶する事を決意した。私のお腹の中にいた小さな命は私のついた嘘で犠牲にされた。

ごめんなさい。

自分が情けなくて悔しくて涙が止まらない。私はすでにこうになつていた。

どこにも出たくない。誰にも会いたくない。笑えない。何もできなくなつていた

手術当日、私の同僚についてきてもらつた。手術中、その同僚はそんなやせ細つた私の姿を見かねてか彼に事実を話したらしい。

彼は激怒した。

ますます傷を深めてしまった。私が恐れていた最悪な自体が起つてしまつた。同僚は悪くない。

ただ事実を言つただけだ。悪いのは嘘をついた私だ。私は1週間で10キロ瘦せていた。

何も食べれない。自分を責め続けていくしかない。新しい命を…彼を…。

全部私が悪いんだ。

昔の私と今の私。

まるで別人だ。

彼の傷を治したい。愛されたい。

私は苦しい。

何もできない。今の私には笑う事すらできない。

彼がない。彼を傷付けた。

彼に会いたい。

そう思い私は長い一日を過ごしていく。あんな嘘をつかなければ…。

今頃幸せだったんだろうな。

何故私はあんな嘘を言ってしまったのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6606a/>

嘘と罰

2010年12月14日18時02分発行